

中村 豊



宮崎県

1989年から、日本近海固有の天然記念物で、推定生息数6,000～10,000羽の絶滅危惧種カンムリウミスズメの生態調査と保護活動を、世界最大の繁殖地である宮崎県門川町の枇榔島で行っている。カンムリウミスズメは平均体重162gで、海の中をペンギンの様に泳ぐ海鳥。中村さんの調査により、ここで繁殖したカンムリウミスズメは、3～4ヶ月かけて関東沖の海域にたどり着き、サハリン付近まで北上し、日本海を通過して、1年かけて枇榔島に戻ってくることを解明した。世界に生息するうちの約3,000羽が生息する枇榔島は、無人島で天敵となる哺乳類は生息せず、最大の天敵は島を訪れる釣人らの残した餌めがけて飛来するカラス類だが、中村さんは対策として、門川町役場を通して渡船に働きかけ、釣人への注意喚起や啓発活動を行った。また、小魚を餌にするカンムリウミスズメが、漁の網にかかってしまうことから、作業中にみかけたカンムリウミスズメの情報提供を漁協へ協力依頼したり、門川町役場の社会教育課と共に、小中学生や一般の地元住民を対象とした講演会や観察会を開催し、カンムリウミスズメのことを知ってもらうための啓発活動を行っている。さらに町の観光資源としての利用を行政に呼び掛け、町興しと絶滅危惧種の鳥や繁殖地の保護保全に取り組んでいる。

(推薦者：門川町)

この度、社会貢献支援財団様から賞を頂くにあたり、いろいろと考えるところはありましたが、長年にわたり私財を投じ、同じことに打ち込んできた評価と素直に受けとめ表彰式に参加させて頂きました。同席された多くの受賞者の方が、私以上に長年にわたり貢献をされていることを知り頭が下がる思いでした。このような機会に参列させて頂いたことは次への励みになり、大変感謝しております。ありがとうございます。

ここに私が評価されたことを少し紹介致します。1989年から枇榔島に上陸し、カンムリウミスズメの生態や行動など繁殖地での基礎的な調査や漁船をチャーターした追跡調査などをボランティアで29年間継続して行いながら、生息地である枇榔島を保全するためにゴミや釣り針、釣り糸拾いの活動を行ってきました。さらに世界最大の繁殖地を持つ、カンムリウミスズメの町としての意識を高めるため、釣人や地元の漁業関係者にカンムリウミスズメの存在を働きかけ、門川町と一緒に年に3～4回、講演会や観察会を開いてカンムリウミスズメの魅力を訴えています。また宮崎県総合博物館のリニューアルで、カンムリウミスズメのコーナーを新設してもらい、県民へその存在を知らしめ希少な鳥がいる事をアピールしています。2007年には門川町と共に「カンムリウミスズメ絵物語」を発行し、門川町民にカンムリウミスズメのことをもっと知ってもらうために町立小学校に配布をしてもらいました。1989年から取り溜めたデータや新規に得られたデータを基に、2010年11月には枇榔島とその周辺海域が国の特別鳥獣保護区に設定され、一層の保護の網がかけられるようになりました。しかし

未だにカラス類によるカンムリウミスズメの食殺は減っていません。そこで、釣り人へのマナーの徹底をお願いしたり、門川町や門川町が募集したカンムリウミスズメ倶楽部の人たちと一緒にゴミ拾いなどの活動を行い、釣り人へのマナー意識の向上を図っています。

その他、ドブネズミやクマネズミが枇榔島に侵入していないか、ネズミ捕獲罠やセンサーカメラを設置してモニタリング調査を定期的の実施し、いち早く緊急な対策が取れるように役場と連携しています。

最後に2016年までは、渡船代や調査船の借り上げ料など全てのことを自己資金で行ってきましたが、最近は門川町の補助があり非常に助かっており感謝しております。



▲ 帰島したカンムリウミスズメ



▲ 網場に現れたヒナ



▲ 調査中



▲ 現地で拾ったカンムリウミスズメの死体などを使ったレクチャー



▲ 子どもたちにカンムリウミスズメのことを知ってもらうイベント

特定非営利活動法人 時ノ寿の森クラブ



静岡県

静岡県掛川市の小さな山村で育った松浦成夫さんは、故郷の里山の過疎化が進んで小川は涸れ、森林が荒廃して周囲の環境に悪影響を及ぼすのを憂いて、森林間伐作業を賛同者と共に2006年に開始し、2009年から植林作業も進め、翌年からはNPO法人として活動することになった。東日本大震災や紀伊半島大水害を契機に、「山から海までの市民が手をつなぎ、森林資源を生かした安心・安全なまちづくり」の必要性を痛感し、2012年に市民協働の「いのちを守る『希望の森づくり』プロジェクト」を開始した。19人で始まった活動は、現在は17法人を含む市内外の202人の会員を有するまでになり、間伐した面積は390haを超え、11万本に達する植林を行った。このように森づくりを通じて、都市と山村が支え合い、森と共生する循環型社会を目指して活動が続いている。

(推薦者：掛川市役所)

理事長

松浦 成夫

表彰式に臨み、人知れず、世のため、人のために尽力した人や団体を探し、社会に代わって称えるという本旨を知りました。帝国ホテル東京の式典は、格調、厳かさ、華やかさ、大きさ、それにも勝る社会貢献支援財団の皆様の心温まるお言葉、おもてなしの一つ一つは、感激の極みでした。そのような栄に浴させていただき、心から感謝申し上げます。

これまで長年にわたり、活動を支えて来てくださった多くの支援者の皆様に、厚く御礼申し上げます。全国津々浦々でもっともっと長く、地道に活動されて来られた方々とお会いし、心を新たにいたしました。この栄を支援者一同で喜び、また誇りとし、今後も陰ひなたなく「いのちを守る森づくり」を推進していくことを誓い、これまでの活動を振り返りつつ想いの一端を記し、感謝の気持ちとさせていただきます。

20年前、ふるさとの森を豊かな姿で未来の子どもたちに引き継ぐことを目指し、山間の小さな廃村集落跡で始めた妻との活動が、11年前から社会の個人や団体の御賛同をいただき、今日のNPO活動に発展することができました。森林は、防災や環境保全のほか人々の心身を癒し、昔から生命の源と言われてきましたが、いまや森林は社会から忘れられ、荒れ果てています。近年頻発する気候変動による自然災害、情報技術や人工知能があふれる中で顕在化する忌まわしい事件を見ると、森林や里山こそまさに現代の生命の源で、未来に残さなければいけない大切な社会的資産ではないかと思えます。

人口の減少や高齢化、社会の仕組みの変化の中で、従来どおり土地所有者による森林里山利用は難しくなっています。これからは、広く社会の多様な主体が参加したナショナルトラスト方式により、森林里山の真の価値が活かされ、都市と山村が支え合う森と共生する循環型社会が実現してほしいと思えます。時ノ寿の森クラブは、その

トップランナーとして自覚を新たにし、努力してまいります。かつて、廃村集落跡へ活動拠点の山小屋を立てる時、将来は子どもたちを集め、遊びも、食住も子どもたちの意志と力によって運営する「自称：山ザル学校」を開いてやりたいと密かに思っていました。今年「森のようちえん」をスタートしました。幼児期には、自然と触れ合う環境の中で、心や身体に不便や辛さを、痛みを、そして喜びや安心の感覚を記憶してほしいと願ってやみません。

理事長 松浦 成夫



▲2006年団体設立時メンバー



▲間伐により再生した里山



▲間伐材の搬出作業



▲希望の森づくりプロジェクト海岸防災植林



▲森と人を結プラットフォーム「森の駅」



▲炭焼きで木の利用拡大

特定非営利活動法人 Basic Life Support KOBE



兵庫県

兵庫県神戸市水上消防管内で消防団員をしている原本静雄さんが、救急インストラクターの資格を取得し、サッカーのワールドカップ日韓大会で救護所警備をしたのを機に、救命手当ての普及活動を行うようになり、仲間と共にNPO法人として発足し、2010年に同市消防局の民間救急団体に登録された。「神戸ルミナリエ」や「神戸花火大会」などのイベントの救護活動にボランティアで参加している。救護活動の範囲を広げようと、救護車両を購入し、車椅子やAEDをはじめとした救急活動資機材もとりそろえ、東日本大震災ではいち早く現地入りして救護活動や物資発送などを行った。

(推薦者：神戸市水上消防署)

代表理事

原本 静雄

この度は社会貢献団体として表彰して頂き、誠に有難うございました。また、日頃忙しい中共に活動してくれる団員、当団体を推薦して頂いた神戸市水上消防署の方々にもお礼申し上げます。

私たち、特定非営利活動法人 Basic Life Support KOBE は、“いざ”という時にお役に立てればという思いで活動をしている救急ボランティアグループです。活動は主に神戸市が中心で、イベント会場の救護所でケガをされた方などの応急手当を行う一次救命処置（救護班）活動、市民への心肺蘇生法・怪我の手当法の講習、普及活動、被災地での救護支援活動等を行っています。救護班活動としては、毎年神戸市内で開催される様々なイベントに年間を通して、約40件程出動しております。「神戸ルミナリエ」や「海上花火大会」等大規模な場合は、隊員を2名1組以上でチーム分けし、それぞれを遊撃隊として会場内に分散して配置することで、救急事案の早期発見や現場到着時間の短縮を図っています。ただ救護所で待機しているのではなく、自らの足で会場を回り、いち早く傷病者を見つける姿勢です。そのためいつでも対応できるようにAED、車椅子、救護車、連絡用の無線機等を揃えています。

救命活動普及講習では、企業や学校等の団体からの依頼を受けて、普通救命コースやケガの手当てなどの講習会を行っています。救える命を救うためには、その知識と技術を持った人が増えることが大切と考え、心肺蘇生法などの技術を習得してもらい一人でも多くの命が助けられるよう活動を行っています。

被災地での救護支援活動としては、2011年の東日本大震災では物資を募り、湊川商店街の協力を得て、寄付された食料品や日用品を被災地へ運搬しました。

今回受賞が決定したと報告したところ、団員を含む多くの人に喜んで頂きました。

式典は大変素晴らしく、懇親会や祝賀会では医療活動で社会貢献されている他団体

の方からも色々なお話を伺う事が出来、非常に励みになりました。今回表彰式のために全国から受賞者が集まった訳ですが、活動報告を見てこんな活動もあるのかと感心すると同時に、これだけ多くの方が社会貢献されている、日本も捨てたものではないと勇気づけられました。自分たちもその一員と認められたのはとても光栄な事だと思つと同時に、まだまだ頑張らねばと身の引き締まる思いがしました。

今回はこのような晴れがましい機会を与えて頂き、誠に有難うございました。この表彰を機に「救える命を救うため」、更なる意欲をもって活動に取り組みたいと思つております。

代表理事 原本 静雄



▲イベント会場にて心肺蘇生講習



▲リレーフォーライフ救護所にて



▲心肺蘇生講習



▲神戸ルミナリエにて



▲生田神社神幸祭救護風景



▲被災地にて炊き出し

点字サークル「蓮」



会長
久谷 洋子

大阪府

大阪府門真市で1973年から久谷洋子さんを中心に、点訳活動と点訳ボランティアの育成を目的に結成され、点訳本の製作や視覚障がい者（児）と新年会やハイキングなどの交流会、アルミ缶（リングプル）の回収、同市社会福祉協議会の広報誌の点訳、点字カレンダーの作成などを行っている。点訳本は大阪府を中心に京都、奈良、和歌山、島根、秋田など各県の盲学校10～13校へ年間200冊程寄贈している。

（推薦者：門真市立市民公益活動支援センター みんなのかどま協議会）

点字サークル「蓮」が昭和48年に誕生して早いもので45年の歳月が流れました。当初は門真市盲人福祉協会主催の点字教室修了者が、その後の活動の場がない…との事で、当時大阪市内で点訳活動をしていた私に「サークルをたちあげる手助けをしてほしい」とお誘いがありました。

点字教室終了時に「点訳を続けたい」と言う人が4～5名いらしたので相談し、サークル名は点字サークル「蓮」とし、連絡場所が必要なので久谷宅を事務所として登録しました。同時期に「広報かどま」に会員募集の記事をのせていただきスムーズに発足、点字の勉強、指導は盲人福祉協会会長にお願いし、本文を打ったあとの表紙、目次、ページ打ち、奥付け等、製本化に向けての勉強をしました。最初の製本は背の部分を糊付けし、表紙との間に白紙をはさみ、糊付けしたのですが余りにも稚拙な出来で、自分たちで製本にすることはあきらめ、日本ライトハウス図書販売部に相談して有料で製本していただくことになりました。冊数を重ねるごとに、スムーズに製本化することが出来るようになり、点訳も楽しく出来るようになってまいりました。その内、パソコンで点訳を…との要望で日本ライトハウスの情報センターにパソコン、点字プリンター、点訳ソフトの相談にゆき、多額の出費でしたが一式購入。早い時期からパソコン点訳を行うことが出来、近年は門真市制施行50周年記念誌や門真市社協だより、カレンダー等、小説やエッセー、詩集以外に点訳しております。

障害者（児）とボランティアの交流を目的として年に4～5回新年会、ハイキング、ミカンやぶどう狩り、花見等々、行っています。長い年月、続けてこられたのは、視覚障害者の明るさ、博学に驚かされ、又、あたたかさを感じる事が出来たからではないか？人間的に深みのある方達とのお付き合いが大いに関係しているのではないかと近年、つくづく思われます。

現在は読書離れ、本離れがすすみ、じっくりと本を読む人が少なくなった…と言われて久しいですが、盲学校で学ぶ小、中、高校生の学童には、いろんな分野の本を手にとって欲しい…と願って無作為に点訳本をお送りしております。これからも健常者が目にする本のごく一部でしょうが出来るだけ、さまざまな本を点訳し、視覚障害者(児)に読んでいただけるよう会員ともども点訳に頑張っけてゆきたい!! と思っております。

今回、社会貢献ということで表彰していただきました事「私達の活動を見て下さっている方々がいらっしゃる」と、とても感動し、又感謝しております。本当に有難うございました。

会長 久谷 洋子



▲伊丹市 昆陽池昆虫館へ



▲市の保健福祉センターで活動しています



▲住吉大社参拝



▲新年会で



▲点訳の確認作業中



▲アスカティア古墳の杜ハイキング

社会福祉法人 大和社会福祉事業センター 障がい者福祉施設 ハートピア谷汲の杜



岐阜県

岐阜県揖斐郡谷汲の山間地の余剰地を、地域住民が社会貢献に使用したいと考え、農林業を取り入れた障がい者福祉施設として2002年に開設された。地域の耕作放棄地や雑木林、竹林を借り受けて、利用する人の適正を考えながら「農業班」「燻炭(くんたん)」班などのグループに分け、米や野菜の生産、燻炭づくりを行い販売もする、また利用者が仕事を持てるよう、業務用の機材を使用して行う清掃業(クリーンサービス)や地元産の小麦を使って生産販売するベーカリーを運営し、好評を博している。施設は19歳から64歳までの男女が利用し、利用者の家庭の経済的、精神的な負担の軽減はもとより、山村過疎地の活性化にも大きく寄与している。

(推薦者：堀口 賢一)

施設長

柏尾 真道

この度は、社会貢献者表彰をいただき感謝申し上げます。式典において、列席者へのきめ細かな配慮と万全の準備をいただいたことに、厚く御礼申し上げます。様々な功績を挙げられた他分野の表彰者の方とも交流を図ることができ、深く感銘いたしました。

ハートピア谷汲の杜は、岐阜県揖斐郡谷汲の山間部に「農作業を取り入れた」障がい者福祉施設として平成14年に開設しました。当時、揖斐山間部に障がいをもつ方の働く場がなく、地域のニーズを受けての立ち上げとなりました。岐阜の自然豊かな資源を活用して、障がいをもつ方の生産活動につなげ、安心して働くことができる場づくりを願いとしてまいりました。開所当初は、石拾い、土づくり等を、農地の開墾作業からスタートしました。初めて、米や野菜の農産物が収穫できた時、皆で喜び、利用者さんも自分達で作った生產品の味は格別なようでした。しかし、時に様々な生産する上での壁に直面し、そのたびに地域の方々の温かいサポートを受けることで、生産活動を立て直すことができました。

また、雑木林や竹林を活用した炭づくりや門松製作も行ってまいりました。門松作業は、葉牡丹の栽培、竹の切り出しから行い、山々の豊かな資源である材料を集め、製作していきます。山間部の厳しい冬の寒さの中、毎年製作納品を行い、少しずつ地域の中でも、広がりを見せ、現在は70対以上の門松を、県内に留まらず納品させていただいております。そして、地域の空き物件を利用した、地元へ愛されるパン屋を目指し、土地の生産物を利用したパン屋の運営を行っております。店舗を構えることによって、利用者の方の地域交流の機会も増えました。

この様に、障がいをもつ方の働く場の充実化を図っていく中で、親御さんの高齢化

に伴い住まいの場の確保にも取り組みました。現在二つのグループホームを設立し、運営を行っております。

今回、様々な功績を残された表彰者の方々との交流を通して、受賞者の皆様に共通していることとして、「人が好きであること」、そして「自分に何ができるか」を常に心に据えておられるように感じました。これからの「私に何ができるのか」、改めて問い直させていただく機会になったように思います。この表彰をいただいたことは、利用者さんをはじめ、職員、ご家族、そしてこれまで関わっていただいた地域の方々にとっても、本当に大変大きな励みとなりました。高齢化、過疎化の厳しい課題が直面する中で、今後も障がいをもつ方が得意分野を活かして、生き生きと活動してもらいたいという願いのもと、地域と連携して資源を活用することで、山村過疎地の活性化に取り組んでいきたいと思っております。

施設長 柏尾 真道



▲もみ殻くん炭製品化作業



▲黒米の稲刈り



▲納品前の門松



▲農業作業風景



▲クリーンサービス作業風景



▲ベーカリー(パン屋)での朝礼写真

更生保護法人 ウィズ広島



理事長
山田 勳一

広島県

ウィズ広島は、昭和10年から、刑務所や少年院を出ても行き場のない人の為の更生保護施設として、彼らの社会復帰の準備、再チャレンジのための支援活動をしている。昨年は127名の利用者を受け入れ、全国から入所の希望も多く、他の施設から受け入れを断われた人も快く受け入れ、稼働率は90%にも届く。25年前、再犯により刑務所に戻ってしまった利用者から、「あのときは希望を持つことができなかった」と手紙に書かれていた事をきっかけに、利用者の心に働きかけ、希望をもって新たな人生を歩んでいくためのサポートに重点を置く体制へとシフトしていった。福祉の専門職員を含め職員の数を増やし、ボランティアとして臨床心理士やカウンセラー等からも協力を得て、薬物やアルコール等の依存や持病、生活への不安等の相談にのるなど、心に寄り添った活動を行っている。また、退所後の生活の安定のために、金銭管理シートと一緒に作成し話し合うなど、年間200回近いイベントを通じて、社会生活に溶け込んで行くため、心のリハビリや、退所した後の社会での生活に不安や寂しさを感じたらいつでも相談に来てほしいと、心と施設の扉を開いて活動を続けている。

(推薦者：更生保護法人 全国更生保護法人連盟/
更生保護法人 函館創生会/更生保護法人 両全会)

このたび、私たちの日常活動に対して第49回社会貢献者表彰をいただいたことは、日夜、施設を利用する人々と共に喜び、悩むスタッフへの最大の贈り物となりました。ありがとうございました。それにつけ、内館牧子表彰選考委員長が自らの身体痛苦にふれ、人の手を求めたいがたやすく声が出せない。そのとき手がさしのべられたらどれほどうれしか、と挨拶されました。このたび、その方々に選ばれたことを心からよろこんでいます。

私たちウィズ広島は、明治期創立された広島の免囚保護事業が途絶えたのを惜しみ、2年後の1935（昭和10）年、宿所、食事を提供し、就労自立を支援しようと民間の人々によって設立されました。以来82年、犯罪や非行があったために、生きづらく生きている人々を支援し、その人たちと共にあろうとしてきました。そして1993（平成5）年4月、かつて犯罪や非行があったが、もう一度チャンスがほしいという1枚の切符さえあれば安心して出入りできる場所、《自由駅》になることを決意し、ひたすら支援力を強化してきました。

そして「心のケア活動」を掲げカウンセリングを導入して以来、多くの関係機関、団体、個人の方々のお力をいただき、SST（社会生活技能訓練）、コラージュ作成会、地域清掃ボランティア活動、金銭管理支援・くらしの知恵塾、高齢・障害など自立困難な利用者の医療など福祉的支援、薬物等依存からの回復支援など各種のプログラムを用意し、これに参加を求め、年間200人前後の施設利用者の人々の自立を支援してきました。

そして2017年10月、当施設を退所しても確かな拠りどころがなく、孤独・不安な生活を余儀なくされている、退所した人たちへの支援をはじめました。また、急増する高齢、障害のある女性の居場所確保のため、'19年度着工をめざして別館女性棟の増設を計画しています。なぜそのように犯罪や非行のあった人たちの支援なのか？ 明治期自由民権運動の弾圧に抗議して投獄され、後にわが国免囚保護の父といわれた原胤昭はいいます。「囚人（ママ）と枕を並べてヒソヒソと話を聞いてみると、不幸な境遇が彼らを牢獄に送っている事を…知った。そのとき私の頭にしっかりと同情の釘は打たれた」（『刑罰珍書集』自序）。それは私たちウイズ広島の原点でもあり、内館牧子表彰選考委員長の《声》でもあるように思います。そしていま私たちは、その《声》を次の時代へつなぐ責務がある、と強く感じています。誠にありがとうございました。

理事長 山田 勘一



▲地域の人々に喜ばれている職員利用者一体となった地域清掃活動



▲認知行動療法にもとづいて支援する 薬物使用生涯からの回復プログラム“ひま～ぶカフェ”



▲「もっと上手になりたい」円滑な対人関係に大切なコミュニケーションに欠かせないSST（社会スキル学習）



▲久々に全員集合した調理、事務、補導スタッフ



▲元安川沿いに建つウイズ 高齢女性利用者の増加に19年度着工予定として定員6名の別館施設を建設予定



▲心身を病みがちな高齢、障がいのある利用者の定期健康診断と生活指導（社会福祉法人恩賜財団済生会病院協力）

特定非営利活動法人 TFG（田川ふれ愛義塾）



理事長
工藤 良

福岡県

2005年に、炭鉱の町として栄えた福岡県田川市で、子どもたちのかけこみ寺として団体を設立。以来引きこもりや、少年院を出院し保護観察中で、更生保護施設の入所を断られたり、親の引き受けが困難な、全国の少年少女の最後の砦として、子どもたちの生き直しを、ボランティアと共に見守り、共同生活をしながら社会性を育み、一人で生きていく力を養うためのサポートを行っている。少年院を出た子どもたちは、元の場所に戻ると再犯の可能性が高く、環境を変えることが必要で、出所後直ちに更生施設で、信頼できる大人に出会い、生き直しの道筋を示す事が、最も再犯を防ぐ上で重要で有効であることを、この団体の卒業生の再犯率の低さが証明している。これまでに150人以上の少年少女と関わり、数年間に亘る共同生活をしながら、生活指導・カウンセリング・学業や就職のサポートを行い、卒業した少年らはボランティアとして団体をサポートする側にまで成長している。また、2016年には全国で唯一となる、女子少年専用更生保護施設を開設し、NPO 法人としては全国初の法務大臣の認可を受けた他、知的・精神・発達障害者の福祉施設も共同運営している。

(推薦者：特定非営利活動法人ローゼーベル)

この度は、社会貢献者に表彰いただき誠にありがとうございます。安倍昭恵会長様をはじめ関係者の皆様方から労いの言葉をいただいたことは身に余る光栄であります。私をはじめ、表彰を頂いた他の方々も、この表彰を頂くためにやってきたわけではありませんが、貴財団より表彰を頂いたことで、私達の活動に対して背中を押していただいたと感じると同時に、これまでの私達の活動をふり返ることができました。

青少年の立ち直り支援事業に携わらせていただいて、今年で12年目となりました。「人は出会いと環境で変わる」をモットーに、私たちは、厳しくも思いやりのある関わりを大切にしています。私自身が非行少年の当事者で、元暴走族総長、覚醒剤使用で逮捕された経験があります。私は、自分が悪の道に引き込んだ仲間を更生させたいという自責の念から、後輩たちを含め暴走族を解散し、ボランティア団体を創設して活動を始めたのが2002年でした。この活動を展開していく中で、同じように非行の道に走った少年少女、その親たちから相談が度々あるようになり、2006年に「田川ふれ愛義塾」という非行少年の居場所づくりをはじめました。そして、2008年にNPOとしての活動をスタート、2009年には法務省より継続保護事業の認可をいただき、少年を対象とした施設を運営してきました。さらに、2016年から、日本で唯一の女子専用施設を開設したところ です。継続保護事業というのは、少年院や少女院を仮退院するのですが、保護者が引き受けを拒否したり、保護者がいなかったりした場合に、社会的自立を果たすまでの準備期間として一時的に預かり、自立支援を行うものです。現在、約25名の少年少女たちが共同生活を行いながら、人生の目標を探し、社会的自立に向けて仕事や勉強をしています。

一言に非行少年といっても、その背景は様々です。私自身もそうでしたが、非行少年は寂しさを埋め、自分の力が発揮でき、必要とされる居場所を求めてさまよっている場合がほとんどです。想像を絶するような生い立ちの中で、罪を犯さざるを得ない

状況にある少年もたくさんいます。苦しいとき、辛いときに傍にいて支えてくれた大人がどんな立場の人だったかによって、人生は大きく変わります。私も幼少の頃、自分を助けてくれる正義のヒーローが現れないかと本気で思っていました。迷い、苦しんでいる少年が求める正義のヒーローの一人になれば、一人でも私自身が味わってきたあの苦しみから解放させることができたらと思い活動を続けて参りました。

私にできる精一杯の支援をしてきましたが、全てがうまくいったとは言えません。言葉では言い表せないような辛い思いをしたことも、悔しい思いをしたこともありました。しかしそれ以上に、うれしさもやりがいも感じることができました。携わってきた青年がスタッフとして戻ってきてくれたり、当塾のスタッフが新たに施設を開設したりとこれまでのあゆみが一つの形となって表れてきているのを感じます。

私たちは、非行少年たちの社会的自立には、本人たちの自己指導能力と一般市民の理解と協力が欠かせないと考えています。また、当事者の発達上の課題等も要因として複雑に絡み合っているため、福祉との連携は欠かせません。非行少年たちの行為の裏にある事実や社会的な背景を知り、関心を持ってもらい、それぞれの立場で、それぞれができる形での支援が必要なのです。

日本にはかつてより、「社会を明るくする運動」という法務省が推進しているすばらしい社会運動があります。しかし、残念なことに地方では認知度も低く、さらに、少年犯罪等に関してはデリケートな問題でもあるためなかなか認知、推進されていません。そこで私たちは本年「社会を明るくする運動」の中でも、その対象を青少年に特化した社会運動を「BLUECROSS 運動」と称し、立ち直り支援の拡充と誰もが住みよい安全安心のまちづくりに向けた社会運動を展開していくこととしました。この運動により、関係機関をはじめとする横の連携を強化拡大し、それぞれの活動の深化充実を図るとともに、社会を巻き込んでいく活動へと展開していきたいと考えています。

この度の受賞で「社会への貢献の営みは行政だけでなく、私達一人ひとりの理解と行動によってもたらせる。その原動力は、人の喜びを自分の喜びとする人の心にある。」ことが多くの皆様との出逢いの中で実感できました。特に立ち直り支援に関しては、私たち志を同じくする仲間が全国に多数おられることもわかりました。この受賞に恥じることはない活動をこれからも継続発展させていくことを誓います。

最後になりましたが、この度の栄誉は、地域住民をはじめ皆様方が長年にわたる、ご理解とご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

理事長 工藤 良



▲BLUECROSS 運動を開始



▲田川ふれあい義塾の外観

彦山 ひろみ



愛知県

愛知県みよし市で1995年から、「知的障害者授産所にささやかな援助ができればいい」とアルミ缶の回収を一人ではじめたところ、それが地域の人々に拡がり、彦山さんを中心に分別ごみステーションを自主運営することになった。やがてそれを知った行政が動き、町営のリサイクルステーションが設置されるまでになった。彦山さんが始めた小さな活動の成長とともに町の人々が触発され「住むからには都にしよう」という機運が高まり、ボランティア団体が次々と誕生し、なかでも生活スタイルを重視した、自主防犯クラブを立ち上げ全市に広がった。現在は地元大学と共催する筋トレ講座や自宅を開放して高齢者の居場所作りなど人と人の結びつきが育まれる活動を続けている。

(推薦者：社会福祉法人 みよし市社会福祉協議会)

始めの一步は平成9年頃、障害者通所授産施設を運営する「あゆみ会」にと、たった一人で始めたアルミ缶回収がきっかけでした。

そのうち、「新聞も」「ダンボールも」との声が上がり、その要望に応えるうちに扱った品目がどんどん増加して、一人ではやりきれなくなりました。そんな矢先、三好町（現在はみよし市）に女性団体連絡協議会が設立され、新興住宅地の三好丘緑行政区の女性ボランティアグループとして「グリーンレディース」が発足しました。私は初代会長になって、リサイクルステーションの運営を主力に活動しました。

使われていなかった公民館横の20坪の農作業小屋に「リサイクルステーション」の看板を掲げて、子どもたちにもわかるように手書きで出し方、分別方法、分別場所など、メンバーが作成して皆に広めていきました。これが町営リサイクルステーション3ヵ所設置に影響があったと思っています。その後グループからは、未就園児支援活動とする「親子ひろば」コンニャク味噌作りの「ナチュラルクッキング」、男性ボランティアグループの「グリーンダンディーズ」などが誕生して、未だ活発に活動しています。

リサイクルステーションは排気ガス規制でトラックが使用出来なくなったので閉鎖しました。現在は「リサイクルを考えるクラブ」を立ち上げ会長に就任、アルミ缶回収ボランティア7名と月2回「あゆみ会」を支援しています。資源ゴミは業者と話し合い、家の前に出す個別回収に切り替えました。収入は減りましたが、前日に青パトのマイクで「明日朝資源ゴミの回収をいたします。子どもさんも一緒に玄関先へ出してください」と流すだけですし、高齢者や忙しい方にはとても喜ばれています。業者が直接集めていきますので産地直送型といっています。

女性団体「グリーンレディース」は、心配していたとおり、役員選出で行きづまり、18年に解散しましたが17年4月より公民館会議室にて老人クラブ女性役員とバナナお

菓子付き100円コーヒー「ひだまりのつどい」を始めていましたので、うまく移行出来ました。

歌声喫茶、エアロビクスを催し物に2日間で80名程の参加がありましたが、平成25年9月耐震工事で半年公民館が利用不可となったことを機会に閉店しました。理由はひとりひとりとじっくり向き合う不安を感じていたからです。今は、我が家で月2回12名位のお年寄りが「足湯」「大人のぬり絵」を楽しんでいます。

12月14日に150名の方とパネル32枚に写真300枚を展示してパーティを開きました。皆様同窓会のように大変喜んでくださいました。本来なら事業に活かすべき賞金ですが、人に使わせていただきました。

表彰していただきまして本当にありがとうございました。



▲「三好丘自主防犯クラブ」地域の方々と



▲公園体操



▲三好丘自主防犯クラブでの活動



▲自主運営していたリサイクルステーション

森 泰子



宮崎県

1962年から宮崎県警察宮崎北警察署内に理容室を開き、署員の散髪のほか、留置施設内に収容された暴力団を含む被疑者の散髪も臆することなく請け負っている。他の警察署では被疑者の散髪を理容師が怖がり、苦慮しているところもあるが、森さんは分け隔てなく客として接し、時には励ました。被疑者の中には釈放後「ありがとう。また切りに来ます」と挨拶に来る者もいて、更生にも寄与している。警察署内理容室は全国にもあるが、森さんは大病を克服し、54年間現役で散髪続けている。

(推薦者：坂元 健児)

このたびは、身に余る賞を頂きありがとうございました。こんな名誉ある賞は自分とは関係のないほかの世界のことと考えていました。表彰が内定しても我が耳を疑いながら、晴れやかな受賞式の日を迎え、感激にふるえました。

昭和10年に宮崎県日南市の田舎の村に生まれ、学も知識もない私が自活の道を目指して理容の世界に入って60年余り、大勢の方に支えていただいてここまで生きてまいりました。ただ一筋に散髪を続けてきたことがこのような大きな賞につながりました。皆様方に深く深く感謝申し上げます。

昭和31年に理容学校を卒業し、昭和37年（1962年）に知人の警察官から依頼を受け、宮崎北警察署の前身である宮崎警察署に理容室を開設しました。当時は署内で散髪が可能であるため、とても重宝がられ多い日は10人以上のお客さんが来て忙しかったのを覚えています。

留置場に収容された被疑者の散髪も有料で請け負ってきました。隣接の警察署からも散髪に連れてきました。新聞でしかわかりませんが、殺人犯や暴力団員、それから身分の高い方もいました。

正直、若いうちは少しこわいと感じましたが、慣れてくると一般の人と同じであることに気がつき、そのうち偏見も全くなり、同じ一人の人間として分け隔てなく客として接してきました。

「更正して頑張るんだよ。もう来るんじゃないよ。」と励ますこともあり、釈放された後に「おばちゃん、ありがとう。また、髪を切りに来ます。」とあいさつに来てくれることもありました。そんなときは、仕事冥利に尽きると感じ本当に嬉しくなりました。

しかし、そううまくはいきません。再犯でまた入ってくる者の方が多く、そんなときは、悲しくなりました。いろんなことがありましたが、気がつけば、もう54年以上

も経ちました。

この仕事を継続していくなかでの一番の危機は、昨年12月に心臓発作で倒れたときでした。このときは、運良く助かりましたが、もう続けることができないだろうと自分でもあきらめかけました。しかし、今年の3月に退院し、一生懸命リハビリをした結果、また9月から理容室を再開できました。

全く来客のないときもありますが、全く気にしていません。警察に育ててもらったと大変感謝しています。その恩返しのためにも私が元気な限り、この理容室を続けてまいります。本当にありがとうございました。



▲宮崎北警察署前にて



▲職員散髪

NPO 法人 再非行防止サポートセンター愛知



理事長
高坂 朝人

愛知県

愛知県を拠点に、鑑別所や少年院を出た後の少年少女の立ち直りをサポートする団体として発足し、2014年にNPO法人に認定された。青少年が犯罪を犯すと、警察・鑑別所・少年院・保護観察官と関わる大人が次々と変わり、信頼関係を構築できないまま社会に戻される。子どもたちが犯罪に走る根底には、心を許せたり相談できる大人に出会って来られなかった、という事も一つの要因にあると考え、鑑別所や少年院面会からスタートし、信頼関係を構築しサポートを進めていく。サポート内容は、①鑑別所や少年院での面会、手紙のやり取りをする「施設内サポート」②施設を出た少年少女らの就労、就学、余暇の支援を行う「社会内サポート」③施設を出た後の自立準備ホームやシェルターでの保護する「住まいのサポート」④少年少女たちの家族の相談に応じる「家族向けサポート」の4種類。逮捕されてから社会復帰後まで、犯罪を犯した子どもとその親も同時に、非行経験のあるスタッフとそうではないスタッフが二人一組でサポートを行い「再非行を減らし、笑顔を増やす」活動を続けている。

平成26年8月「本音と希望を元に再非行を減らし笑顔を増やしたい」をキャッチフレーズとして、「施設内サポート」「社会内サポート」「住まいのサポート」「保護者サポート」を中心に再非行防止活動を行うため法人設立をしました。

当法人は、すべての非行少年（少女）は、変われる力を持っている事を信じ続け、「本音と希望」を尊重しながら、逮捕から出院後まで、一貫して寄り添いサポートと、非行経験がある当事者や、研究者、様々な専門性を持ったスタッフと会員がチームとなって、再非行を減らし笑顔を増やす社会づくりを目指しています。

平成27年からは、「社会的居場所（自立準備ホーム）」の運営を開始し2年が経ちました。現在では、非行に至る背景の一因にもなっている、虐待やネグレクト、ひとり親、生活困窮等で、社会的養護が必要であるにも関わらず、「少年法」や「児童福祉法」の支援策から漏れた非行の危険性がある少年（少女）や、出院後戻り家庭のない少年（少女）、鑑別所で保護者の身元引受拒否や、少年院の出院時期が大幅に過ぎても行先がない少年（少女）を、積極的に受け入れています。

運営している社会的居場所では、親代わりの寄り添い支援と、障害や就労困難等、専門家や団体と連携しながら複合的困難を抱える子どもを多方面から支え「自分と未来は変えられる。でも一人では変えられない」をコンセプトとした環境づくりを行っています。

今後は、サポート終了後少年たちを見守る「アフターケア事業」や、愛知県の再非行防止活動のみならず、全国の活動団体と連携を図り、未来ある少年たちの生き直しができる社会づくりを目指し準備を開始しました。

この度、社会貢献する団体として、当法人が表彰され本当にありがとうございます

た。内館牧子委員長からももっとも困難な人たちを支える団体の一つとして講評をいただき身が引き締まる思いがいたしました。表彰式では、理事全員が参加させていただき、いままでの活動が走馬灯のように思い出されました。そして、様々な団体が多様な社会貢献活動をしている背景には、それを支えるたくさんの人、理解ある家族がいるからこそ成り立っていることを実感しました。

今回の表彰を胸に、明日からまた新たな一歩がスタートします。誰もが幸せに暮らせ、立ち直りできる社会づくりを目指して邁進していきたいとスタッフともども心に誓い、今後も同様の継続活動をしていきます。

理事 川合 みゆき



▲中日新聞記事



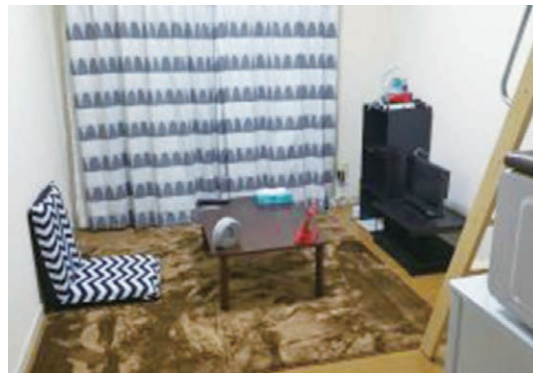
▲再非行から離れる勉強会（研修会）



▲再非行から離れる勉強会（わかちあい）



▲再非行から離れる勉強会（少年の体験談）



▲自立準備ホーム